

インタビュー

伊達宗浩氏に聞く

聞き手

鈴木勇一郎

山中一弘

大江満

編集

山中一弘

(二〇一〇年五月十二日、七月二十九日収録)

伊達宗浩氏略歴

- ◆一九四一年、本学経済学部卒業。古川電気工業勤務。
- ◆一九四二年、応召。工兵隊を経て関東軍情報部特務機関に入隊。ハルビン、黒河で諜報活動に従事。
- ◆一九四五年、終戦後、シベリアに抑留される。
- ◆一九四九年、帰国。
- ◆一九五〇年、立教小学校勤務を経て同年四月、立教大学学生部に勤務。
- ◆一九五一年、学生部生活課長。
- ◆一九五二年、大学を休職して、米国ノースウエスタン・ルーテル神学校に留学。
- ◆一九五五年、同校を卒業し、立教大学に復職。
- ◆一九五九年、総務部広報課長。
- ◆一九六四年、秘書課長兼務。
- ◆一九六六年、新設された総長室の室長に就任。
- ◆一九六九年、図書館副館長、七一年、図書館長事務取扱兼務。
- ◆一九七二年、総務部長。
- ◆一九七八年、学院本部事務局長。七九年から大学総務部長を兼務。
- ◆一九八三年、定年退職。

## 立教入学の経緯

——伊達さんは、奈良県の宇陀中学校をご卒業になったわけですね。奈良県の中学校、それもわりあい山の中の中学校ですけれども、そこをご卒業になってどうして立教大学をお考えになったのでしょうか。

**伊達** 卒業する前の年の一二月に、みんなが大阪の朝日新聞かなんか見学に行くというので、それをサボって友だちと一緒に映画を見に行った。家に帰ったら、その晩に腸チフスになったわけですよ。卒業まで広い隔離病院にずっと入院していて、その病院を出たときは確か、奈良公園の桜の花が散る頃でした。どこも受けるところがない。だいたい受験する学校は全部終わってしまったから、浪人したわけです。

そうしたらちょうど僕の教会の関係で、北川(三三夫、昭和一二年文卒、後のシカゴ大学神学部長)さんと、山田襄(昭和一六年三月文卒)とって後に東京教区主教になる人がいて、それが僕の子どもの頃からよく知っていたので、親父が家に呼んでどうしたらいいか相談したらしい。そうしたら、「立教によこしなさい。立教は九月に編入試験がありますよ」「じゃ立教に行け」。そういうわけで僕は九月に編入試験を受けたわけです。編入試験のときは、後に俳優で有名になった池部良(昭和一六

年三月文卒)とか、大学チャプレンになった岩井祐彦(昭和一六年三月文卒)とか、あの連中が一緒でした。十何人採ったんだけれども、編入試験はけっこう難しかったですね。

僕は立教なんて今まで全然行こうと思ったこともないし、知らなかった。でも二人に勧められて親父が「行け」と言うものだから。ちょうど聖公会の学校だったし、親父やおふくろが聖公会の信者でよく知っていたわけです。

——伊達さんご本人は信徒でいらしたのですか。

**伊達** うん。だって両親が信徒だったから。

——じゃもう幼児洗礼を受けられて。

**伊達** そう。幼児洗礼を受けたんだけど、僕は教会に行ったこともない(笑)。だから、本当に教会らしいところには立教に来て初めて行ったわけです。僕がいた中学は田舎だったから、教会なんてなかった。全部仏教で、クリスチャンなんて誰もいなかったしね。

——入られて、当時、立教はどんな印象でしたか。

**伊達** 僕がいた奈良というの、中学生は、大人と言っておかしいけれど、上に行く学校がなかったから、わりに大人らしいあれだったんですよね。立教に来たら隣に立教中学があつて、えらいまた子どもで若く見えちゃってねえ(笑)。本当に驚きました。大学自体の雰

囲気も好きだった。ただ驚いたのは、中学生が子どもらしくてね。もうちよつと自分たちのほうが大人のような気持ちだった。

——やはり奈良県全体がそうですね、とりわけ奈良県の山岳地帯のようなどころですから。また、宇陀中学の生徒と言えば、その地方では最高学府の生徒だったわけですね。

伊達 そうそう。最高学府ですから。

——だから、よけいに大人っぽかったということなんですかね。

伊達 かもしれませぬね。中学生といってもだいたい高等小学校を終わってから来るのが多かったから、二〇歳近い生徒もいてね。同級生を家に迎えに行くと、その最上級生の兄貴が煙管でたばこ吸ってぼんぼんやって、なんて。そんなところだったからね。だから本当に田舎の中学校だった。でも、あそこから早稲田に来たり中央に来たりしたのが同級生ではだいたいいるから、僕も腸チフスにならないで五年までちゃんと出たら、いまだうなっているか分からない。

——そうですね。

伊達 立教なんて知らなかったからね、田舎だから。

### 立教大学の職員に

——さて、このご本〔伊達宗浩著『備えられた道—私の歩んだ大正・昭和』〕は非常に面白くて、生い立ちのところとか関東軍のお話とか、ぜひお聞きしたいことがいっぱいあるのですが、時間の関係もございませうから、今日は大学運営について、とりわけ松下正寿総長〔一九二九年〜四三年教授、五五年〜六七年総長など〕時代のことを中心にお伺いしたいと思います。

特に、松下総長は昭和一八年からしばらく大学にはいなかったのですが、いきなり昭和三〇年に総長として復帰されたわけです。率直に言ってしまう方だったというふうには。

伊達 僕は学生の頃、松下さんに教わったわけです。英語でアブラム・リンカーンとか何かね。だからあまり……、どう言ったらいいかなあ、ちよつと取っ付きにくい、そんなに人好みのする人ではなかったわね。

でもあの人は、いろいろ社会的に活躍しましたし、それから、国際裁判〔極東国際軍事裁判〕の弁護士をやられた。それで校友で。僕はちよつと松下さんが総長になるとときにはアメリカにいたんですよ。帰ってきたらちよつと総長になるときだったので、その辺のいきさつはよく知らないんです。

——なるほど。就任されたときのことは。

伊達 はい。校友会の人たちが推薦したんじゃないかと聞いているんですがね。

——伊達さんは、アメリカに行かれる前は大学の学生部にいらっしやったわけですね。

伊達 そうです。僕は立教に勤めたのは、シベリア〔留〕から帰って、することがない。当時は古河電工の電池課というところにいたわけだけれども、僕が応召中に電池課が独立し、横浜に古河電池工業という会社ができ、そこに身分が移っちゃったわけ。僕が帰ってきてもほとんど知っている人がいなくなつたし、あまり面白くない。立教を出てすぐでしたからね、会社に行つたのは。会社よりも学校のほうによく知っている人がたくさんいたんで、挨拶方々〔大学に〕お伺いしたところ、ちょうど小川〔徳治、経済学部教授〕先生などがいて「きみ、それだったら学校へ来いよ」というわけね。それで学校に残ったわけですよ。

——ご本の記述によると、一九四九年にシベリアから帰ってきて岩井祐彦チャブレン〔在任一九四六年〕、退任時期不明〕に相談に行かれたというふうに書かれていますね。

伊達 そうそう。学生時代、同じチャブレンハウスにいて、あそこに僕も泊り込んで一緒だった。

——その前に同志社のオーテイス・ケリーさんという外国人教授にお会いになつていて。

伊達 ケリーね。はいはい。

——当初、ICU〔国際基督教大学〕を作るから設立を手伝って欲しいというお話だったけれど、岩井さんに相談に行ったら、ICUなんて海のものとも山のものともつかないから、だったら立教で働いたほうがいいということだったわけですね。

伊達 そうそう。ジョン・ロイドという、昔から知っていたミツシヨナリーがやはり京都にいたんですよ。シベリアから帰ってそこに挨拶に行ったら、同志社に、戦時中ハワイで日本人の捕虜収容所長をつとめていたケリーというのがあるから一緒に行こう、というわけで、同志社のアーモスト館に行っている話したんです。

〔ケリーが〕「こういうわけで僕はICUを作って教務部長をやるんだ。入学試験も普通の入学試験ではなく、各学校を回つていい学生をピックアップして入れてやるんだ。一緒にやろう」「それは面白いから、一緒にやろうじゃないか」。僕はそのつもりでいたわけですよ。そのつもりで立教に行ったら、岩井くんも「ICUといつたって聖公会の学校じゃないし、まだできるかできないか分からない。立教に来いよ」と言うし、小川さんもそう言うし、それで立教に行つたんだな。

——小川徳治先生とはもう学生時代から……。

**伊達** 小川さんも学生の頃に教わったわけ。小川徳治さんも先生だったし、松下さんも先生だった。そういう先生がたくさんいたわけです。佐々木先生〔順三、総長在任一九四六年～五五年〕は知らなかったんだけれども、佐々木先生の息子さんの研二君が僕よりも何年か下で、よく知っていた。そんな関係でよく佐々木先生のところ遊びに行ったことがあったんです。

〔帰国の挨拶に行った〕あのとときの学生部長が小川先生で、最初に小川先生のところに行ったら「立教に来ないか」と言われて、「それは考えましょう」と。

僕は両親が奈良にいましたから奈良に帰って考えて、じゃ立教に勤めようということで勤めるつもりで学校に行ったところ、大学は四月でないと採用時期じゃない。一月だったの、とりあえず小学校に行け、ということになった。あの当時、小学校の事務長が、大学の英語の先生をしていた宮崎伸郎さん。そういう人で事務のことにはあまり詳しくないから、僕はその庶務課長代理かなんかになって、事務の仕事をやったんです。

ちようど二月頃、そこへ行ったのかな。二月、三月……。四月に大学のほうに来いというわけで、移っちゃった。

いまでも小学校からはいろいろなものが来るわけです

よ、OBの職員というわけで。僕は自分では全然、小学校の職員としての資格はなかったしね〔笑〕。それで〔大学の〕学生部に行ったわけです。

学生部に行ってもあの当時、事務の組織というのは総務部と教務部と就職部の三つだったのかな？ 総務部長は秦〔二郎、在任一九四八年～六六年〕さんがやっていて、教務は松本平次右衛門〔大正九年商科卒〕さんといって、これも立教の古いOBです。それから就職課〔学生人事課〕が、背のちっちゃい人で……、綱本鶴吉〔昭和三年商学部卒〕さん。やっぱり立教のOBです。三人が部・課長です。あとは教務などに課長が何人かいたんだけど、だいたい昔は、事務職員は大学出を採らなくて、みな給仕や何やから上がった人が多かったでしよ。そういう人たちが課長になったわけです。だから、大学出の部・課長は三人だったわけよ。ところが、二人の課長は昔の古い人で、座っているだけ。秦さんがひとりで全部やっていた。だから、立教大学は秦さんが持っていて、予算から決算から人事から全部、秦さんがやったわけ。

あの当時はちようど私学が盛んになる時期で、またみんな大きくなったでしょ。早稲田とか、慶應とか、それから法政、明治、中央。私大連盟と私大協会と両方作って、私大連盟のほうは昔の旧制大学が中心で、私大協会

は戦後〔大学〕になった新しい大学が中心です。秦さんが連盟のほうでいろいろと活躍したらしい。そういうので立教の名前は大学間では相当売ったんだけど、立教大学自体はちいちゃかったから、一般には知名度が低かった。それがどんどん大きくなり始めて、女子学生も採り始めたりなんかしてね。

——松本さんとか、そのあたりの方というのは年齢がもつと上だったのですか。

伊達 年齢は相当。もう五〇、六〇に近い人だった。

——ですから、若手で大学出の事務職員というと、本当に限られていた。

伊達 そうそう。限られたというか、本当に僕一人。あとは全部給仕から上がった人が多くてね。そんなことではいけないといつて僕は、これから大学が大きくなるんだから、大学の職員もやはり大学出を採らなきゃいけないだろうと考えたりして、そういうことを、ちょうど松下さんに代わったときに松下さんに……。

松下さんがどういうことで僕を調べたのか知らないけども、ある日突然、「伊達君、めし食いに来いよ」っていうわけで四谷のお宅によばれて、奥さんの手料理をご馳走になった。「きみ、秘書課を作るから、ひとつ僕の秘書課長になってやってくれ」というわけです。僕もとにかく、早稲田、明治、法政、慶應に負けられないような大

学にしなきゃいかんという思いがあったから、「できるだけやりましたよ」と。それで秘書課を作って、行ったわけです。

だから、学生部にはあんまりいなかったのかな。どのくらいいたのかな。

——昭和二五年から二六年で、もう昭和二七年には……。

伊達 そうか。アメリカから帰ってすぐに学生部を辞めて、総務部に行ったんだ。

——はい。

#### アメリカの神学校へ

——伊達さんはアメリカでは、ノースウエスタン・ルーテル神学校に留学されたわけですね。

伊達 ええ。結局、僕はいまになって思うんだけど、北川さんという人がいたんです。立教にぼくを呼んだというか、連れてきたのも北川さんだし、そのお父さんの教会も知ってたわけですよ。兄さんも北川台輔〔昭和八年文卒〕という、立教ではわりあい有名な学生だった。

——北川三夫さんのほうですか。

伊達 そう。三夫さんのほうと僕は親しくて、あの人が先にアメリカに行っていたんです。いつ行ったのかよく

分らないうちに行っちゃった。シベリアから帰ってきて文通を شدいたので、結局、僕を牧師にしたかったんだね、あの人は。「アメリカに来ないか。きみはシベリアで社会主義の国も見たんだし、アメリカを見るのも立教のために非常にいいよ」。そう言っ呼んでくれたわけです。僕も別に行きたくはなかったんだけど、まあ、アメリカに行くのもいいだろうなと思って。ちょうど一年ぐらい立教にいたのかな、学生部に。

——はい。

**伊達** それで、「行きますよ」と言っ。その間、佐々木順三先生にも北川三夫さんが直接手紙を出したらしくて、佐々木先生もよく知っていたわけ。上のほうから行け行けと言われる。ポール・ラッシュとか、いろいろな人がいたでしょう。外人も行け行けと言うから。僕は英語も何もできなかったんだけどね。あの頃は英語の試験があったりしたんです。英語の試験なんか落ちちゃったけど、いつの間にか行っしまったよ(笑)。行く気になっっちゃって。

結局僕は本当に、「シベリアを見て、アメリカを見て」という気持ちでしたから、そんなに向こうで牧師になるつもりにもならなかった。神学校に行きながら、北川台輔さんのお手伝いをしていました。

あの辺は日本人がたくさんいたわけですよ。日本人が

キャンプから出てきて、子どもたちが全部……。昔はウエスト・コーストにいたでしょう。みんなこっち(中西部)に来ちゃったから、子どもたちを頼ってきた人たちがたくさんいた。その人たちのために日本人の教会を作っいて、その手伝いを僕はしたわけです。片一方で神学校に行くということだね。そんなことだったから、三年経ったら帰るつもりでいました。

三年経って帰ってきたら、立教のほうでは秦さんなどが、僕が帰ってこないのではないかと思っいたらしい。

——ミネアポリスでしたっけ。

**伊達** ミネアポリス。

——これは、聖公会の神学校ではないんですよね。

**伊達** そう。聖公会の神学校がなくてルーテルの神学校に。というのは、行くためには奨学生で行くのが一番いいだろうと。お金がないからみんな奨学金を受けるわけですよ。その神学校では、向こうで食費も出してくれるし、寮費も出してくれる。みんな向こうが出してくれるから一番来やすいだろうというんで、北川台輔さんがみんな世話してくれたわけ。

——というのが、ルーテル派の神学校に行かれた事情なんです。

**伊達** そうそう。そこはルーテル派の神学校しかなく

て。台輔さんは聖公会だったけども、わりにあちこち顔が広くて、ミネアポリスでは「ファーザー・ダイ」と言ったら有名でね。ちょうど日本の大使みたいなもので、誰か偉い人が来たら、たいがいその台輔さんが行ったわけです。顔が利いたものだからね。

——三夫さんもその近辺におられたのですか。

**伊達** 三夫さんはシカゴ大学の教授だった。僕を呼んでくれたのは三夫さんだけど、実際に面倒を見てくれたのは台輔さんです。いま考えたら、きっとあの人たちは僕を牧師にしたかったんだね。

——そうかもしれないですね。三年おられても、結局伊達さんは、特に聖職になろうというような気持ちの変化はなかったですか。

**伊達** 全然そういう意思はなかった。だから、神学校で習ったことなんか何も憶えていない(笑)。

——将来、立教でその国際的な視野が役に立てばというような……。

**伊達** そうそう。将来、立教に帰るつもりでいましたからね。

あの頃、小川徳さんが、確か何かで英国に行って、いま、チャペルに聖書台があるでしょ、あれをもらった。

——一九五三年、英国エリザベス女王の戴冠式のときですな。

**伊達** そうそう。帰りにアメリカに寄って僕のところへ寄ってくれたんだけど、そのときにも結局、僕が立教に帰るといふことを思わなかったんだね、小川さんは。だから立教に帰って僕は、初めは囑託でいたんですよ、席がなくて。あれはいつだったかなあ。一〇月頃に帰って……。

——一九五五年に神学校卒業となっておりすね。

**伊達** はい。神学校を卒業して、卒業式が五月頃だったの。

——そうすると帰ってくると秋。確かにちよつと中途半端な時期ですね。

**伊達** 九月か一〇月に帰ってきて「立教に」行ったら席がない。囑託でいなさいというわけで囑託でいて、二月頃じゃないかな、正式に立教の職員になったのは。給料をもらったのはね。それまでは囑託手当をもらったの。

——ポール・ラッシュのことはよくご存じだったですか。

**伊達** ええ、ポール・ラッシュも学生の頃からよく知ってたんです。ポール・ラッシュだのブランちゃん(「ブラINSTADT教授」)だの。僕は学生の頃はほとんど勉強しなくって、あそこの外人の家にはかりゴロゴロしてましたからね(笑)。だから、ポール・ラッシュの家にはしよつちゆう行きましたよ。



——校宅の五号館というところですね。

伊達 そう、五号館で。ポール・ラッシュとか、ダグラス・オーバトンとか、ブランスタッドとか、ああいう人たちはみんな昔からよく知っているんです。オーバトンは僕が学生部にいる頃に来たんですよね。アメリカに僕が行くと言ったときには、オーバトンは横浜の領事をしていて、そういう関係もあつていろいろ尽力してくれていたんだねえ。じゃなきゃ僕は英語なんか全然できなかった（笑）。

### 帰国、大学の機構改革

伊達 秦さんが、僕はもう帰ってこないと思つたらしいんだよね。帰ってこないと思つたんで、僕のあとに工藤君を採つたの。工藤俊夫（昭和二五年一二月経卒、総務部長など）。

——工藤さんは伊達さんよりも何歳ぐらい下ですか。

伊達 一〇年ぐらい若い。だから、ちょうど僕がアメリカに行った年に卒業したぐらいです。

——そうすると、伊達さんがアメリカに行かれる前の席は、工藤さんによって埋められていたということになるわけですね。

伊達 そうそう、工藤君がいて。帰ってきたら席がない。行くところがなくてブラブラしていた。秦さんも僕

が立教に帰ると思つていなかったらしい。しかし、三年間のあれ（休職）というのがちゃんと残っていますし、何とかしなきゃいかんなど思つたんでしょう。

あの頃は各学校で雑誌を出したわけです。早稲田は「早稲田学報」、慶応は「三田評論」。秦さんが連盟にいたものだから、「立教もやはり出さなければいかならう。きみ、することなきゃその雑誌を作れ」というわけです。

——秦さんのアイデアですか。

伊達 秦さんのアイデア。僕は雑誌なんか作つたことなかったんだけど、「とにかくやりましょう」というわけで引き受けました。

やりましようと言っても、一人なわけですよ。いま何になつているのかな、昔の経済学部の教授会がずっとあつた。

——三号館。

伊達 あそこは昔、寮だったわけ。入口の一番広い部屋、一番いい部屋が風呂場になつていて、コンクリートの湯船なんかありました。それを潰して、入口に部屋を作つた。まだ広報課ではなく、「立教」編集室というのを作つた。そこに僕が一人いて、いろいろな校友が助けくれたり、いろいろな業者が助けくれたりして、ようやく雑誌を作つたわけです。

——広報課にならない前段階として、雑誌「立教」を作られたということなんですか。

伊達 そう。

——それは秦さんのアイデアだし、イニシアチブで行われた。

伊達 そうそう。秦さんに作れと言われて。僕はそんなの作ったことなかったけれど、アメリカに行く前、学生部にいたときに「チャペル・ニュース」を作ったことがある。そういう経験は多少あったんだよね。

——「チャペル・ニュース」もご担当されていたんですね。

伊達 そうなんです。「チャペル・ニュース」は僕が作ったんですから。

——そうですね。それで、当時、大学の運営というのは、そういう事務的なこと、人事のことも全部、秦さんが握っていたわけですか。

伊達 そう、握っていたね。

——秦さんと松下総長との関係はどうだったんですか。

伊達 秦さんと松下総長との関係は、僕は個人的にはよく知らないけども、松下さんが総長になったわけでしょう。ところが、予算から決算から全部秦さんが出して、「こうなりますよ」って部長会で通す。「あれじゃ僕は仕事がいけない。決算はあれだけでも、予算を作る

のはやはり総長が知らなきゃいかんだろう」。そういうことで総長室を作るという話になった。それで総長室を作り、そこで予算をやるというわけです。

予算をやるのも秦さんが全部やるのではなくて、部長会で各学部から予算を出してもらおう。あれはずいぶん時間がかかった。二か月ぐらい掛かったかね。それで予算を作ったんですよ。だから、僕が雑誌をやりながら秘書課長になって、予算会議にも出たんです。

そのうちにだんだんいろいろな課を作ったんだね。秘書課、広報課を作った。広報課が先にできた。

——はい。そのあとに秘書課。それで、松下さんに乞われて秘書課長も兼務されたわけですね。

伊達 秘書課で全部兼務したわけね。秘書課を作ったときは、銅直（幸子）さんと（ジーン・）レーマンさんと三人だったのかな。最初の仕事は、鈴木さんが書いていたあとを引き継いで、部長会の記録を取ることだったんです。部長会は河西（太一郎、元経済学部長）さんと菅（円吉、元文学部長）さんが顧問みたいな形で出ているんですが、それが辞めて、大久保主教を部長会のチャプレンにした。

——ああ、なるほど。それまで部長会にチャプレンは出ていなかったんですか。

伊達 出てなかった。秘書課長、広報課長。それから雑

誌編集をやり、何やったんだっけな。あの頃、いろいろなことをやったんですよ。何かほかにやったこと書いてありますか。

——いや、基本的にはやはりそのあたり。総務畑、庶務畑、秘書的業務、広報業務。それから総長室長。

**伊達** 総長室を作ったときは本当に大改革ですね。いままでは広報課も何も全部総務部だったのを、総長室に広報課と、校友課というのを作っただけです、秘書課を作る時に。いままで校友課は、ぜんぜん学外にあったわけ。ソノベさんという人がやってね。それを、校友課を作って総長室に入れたわけです。総長室がやはり校友行政にタッチしようと。

——そういうあたりのこと、つまり校友課を総長室のあたりに入れていくというのは、松下総長の意思だったわけですか。

**伊達** うん、あったわけですね。だいたいほとんどそうですね。

——そうすると、なんとなくのイメージとしては、昭和二〇年代の佐々木総長時代というのは、実質的には秦さんがずーっと……。

**伊達** 学校管理をね。

——管理をしていた。ところが、松下総長に代わってくる。そうすると、やはり松下総長自身が実際に大学の運

営にも力を持つていこうとする。

**伊達** そうそう、そうそう。

——そうすると、そのあたりの機構改革はどうしても必要になったということなんですね。

**伊達** そういうこと。

——その中で、例えば予算について、つまり総長が財政を管轄するようになってきた。

**伊達** はい、はい。秘書課を作ったときに、橋本君（一夫、昭和三一年経卒）が来たのかな……。橋本君は、学外理事の藤田さんがスカウトしてきたんです。それから松下総長が、組合対策の専門家として英文科を出た坂井成光さん（昭和二七年文卒）を連れてきました。彼がいた期間は短くて、一年か二年ほどでいなくなってしまうけれど、数年後に奥さんから彼が亡くなったという手紙をいただいた記憶があります。それから中島喜代三さん（昭和三八年経卒）が人件費の担当。

——橋本さんは証券会社出身ですね。何をやってらしたんですか？

**伊達** 主に会計をやっていた。それまでは秦さんが全部予算を持ってきて「これで」って、頭ごなしとってはおかしいけど、決めてたんですね。それを、みんなが相談して予算を作る。

——橋本さんがいらつしやるまでは予算は総務で秦さ

んが作っておられたということですね。

**伊達** そうです。総務部会計課でね。あの当時、秦さんが会計課長、用度課長を兼ねていた。

——わたしが知っている頃は、予算担当はたしか秘書課ではなくて総長室の調査役というスタッフでしたが。

**伊達** あれは秘書課じゃなかったの？ あの調査役というのを作ったのは、そろそろ課長になってよさそうな人にポストがないというんで、名前を作った。だいたい調査役と課長と同じような待遇をしたんですよ。待遇は調査役で、所属は秘書課だったわけです。各課でも調査役を作ったわけでしょう。

——このご本によりますと、総長が財政を管轄する運営組織を作る。そういうふうな指示を総長から受けた。国際文化会館の一室を借りて、極秘裏に総長の依頼を受けた数人の若手教員とともに総長室の設置に伴う新機構の立案に励んだ。それに数か月掛かった、という話なんですな。

**伊達** うん。

——「数人の若手教授」というのは、具体的にはどういう方だったんですか。

**伊達** 岩井君とか。チャプレンの岩井君っていたでしょ。

——岩井祐彦先生（チャプレン一九四六年）、退任時期

不明）。

**伊達** 岩井祐彦。それから西山千明（昭和二五年三月経卒、一九六二年）社会学部助教授、六五年～九〇年教授）。やはり社会学部の西山君と同じような若手だった……武澤信一（一九五八年）社助教授、六〇年～九一年教授）。

——その数人ということなんですな。

**伊達** 数人だよ。ほんとの数人ですね。  
——そのように総長室を立ち上げ、予算権限とかも次第に掌握していく。その一方、やはり財政がかなり良くなかった、というふうなことも書かれています。

**伊達** あれは、授業料値上げしかなかったわけですよ。みんな授業料を値上げしたんだけど、あの頃はちようど学生運動が盛んになってきて、やはり学費値上げ反対が中心だった。

松下さんが辞めたあとで、佃さん（正晃、総長事務取扱一九七一年四月一日～七二年四月二一日、総長七二年四月二一日～七五年七月四日）のときだと思いましたね。松下さんの終わり頃に相当苦しかったんだけど、授業料を値上げせずにきたわけですよ。あの頃、矢作さんという営繕課長がいました。「ボイラーを交換してもらわなきゃ耐用年数を過ぎて爆発しますよ」「お金がない。しょうがないから爆発するまでやれよ」（笑）。

その頃はお金がなかった時代です。

### 大学の拡大発展計画

——実は部長会の記録をいま読んでいるのですが、松下総長時代には、だったらやはりお金を集める必要があるということ、F O R、Friend of Rikkyoというのを作って、財界とか、いろいろなところからお金を集めたりするようになったわけですよ。

伊達 そう。あれは松下さんが学外に募金のあれを作ったわけですよ。その事務をやった山本君というのは、いまその教会に僕は一緒にいるんだけど、彼がF O Rの事務所について、時々学校に来た。確か神田あたりに事務所を持ったんです。それであちこち回ってお金を集めたでしょ。だから松下さんはそういう面では、学内、学外でも相当活躍した。僕は学外のことあまり知らなかったですからね。

——部長会の記録を見ると、吉田茂とか、政財界に……。

伊達 そうそう。

——どうしてそういう関係があったのかというのはいまひとつ分からないところがあるのですが、やたらそういうのが。

伊達 国際裁判の弁護士だったでしょ。そういうことで

大学に来る前にあちこち顔が広がったんですよ、日本の政界、財界とね。そういう関係じゃなかったですか。だから、原子力のあるそこ「原子力研究所の開所」のときも吉田さんに来てもらったり、いろいろしたわけです。僕はそういう松下さんとあれとの関係はあまりよく知らない。

——アメリカにもF O Rの事務局みたいなものを作っていたんですね。

伊達 ええ、作ったんです。F O Rを作って、手拭いを送ったり提灯を送ったり、いろいろなお土産作りをした覚えがありますよ。

——映画も作ったんですね。

伊達 ああ、映画を作りました。映画はねえ、一回、二回……。そうそう、「栄光の立教」というのを作った。あれはむしろ学生集めです。あれをあちこち持って歩いて、立教の一年間の生活を紹介してね。あれはほとんど僕がシナリオを書いたの（笑）。初めは読売新聞「読売映画社」に頼んだけど、やはり映画会社の人だから学校をよく知らないでしょう。だから、初めの頃のシナリオはほとんど僕が書いたんですよ。

——あれの英語版もありましたね。

伊達 英語版も作りましたね。

——アメリカでも巡回上映をしていたみたいです。

伊達 そうでしたっけ。

——はい。この部長会記録を見ると。アメリカの事務局で「ミセス・ヘーレイ」「ヴァージニア、一九五四年」経・般・講師、六〇年〜六八年般・講師」という人が、やたら出てくるのです。

伊達 あの人はどうして立教に来たのかな、僕もよく知らないけれども、とにかく立教の先生だったの。ヘーレイさんといって、うるさいばあさんでねえ(笑)。なんだかんだって言いに来ただけども、お金集めなんかは非常に熱心な人でした。その人がほとんどアメリカとの窓口になってやったわけですね。レーマンさんもいたけど、レーマンさんはあまりそれはしなかったなあ。やはりヘーレイが……。外国人が七〜八人いましたけど、ミセス・ヘーレイがいわゆる管理運営面に一番口出してきて、自分でFORRのことをやってくれたりしたんです。だから、僕たちはあくまでもその手伝いというか、付き合ったわけです。お土産を作るのも、こういうお土産がいいだろうとか何だとかサジェスチョンしたりして。——そういう松下総長が、政財界とかアメリカとかいろいろなお金を集めていったわけですが、けっこう集まったものなんですかね。

伊達 集まったんでしょねえ、僕はあまりよく知らないけども。でも大学の財政を潤すほどは集まらなかった

んじゃないかな。ただ、立教の名前を売ったことは大きいね。

——なるほど。

伊達 だから、お金を集めるということもあつたけれど、一つは「立教」という名前をあちこちに売ることが大きな目的だったわけでしょうね。立教そのものがまだ、有名でもなかった。ちいちゃかったからね。

——原子炉を誘致したというのもそういう意図の下だったのでしょうか。

伊達 でしょうね、おそらく。あれは初め、アメリカ聖公会の総会がフイリピンかどこかに贈ろうかと、そのつもりだったわけでしょう。それを松下さんがアメリカに行つて、その総会に出て、いや立教ではこうするから立教に寄越したほうがいい、ということでもらってきたわけでしょう。だからおそらく、立教に原子炉を作るということは一つのニュースだったわけです。

——そういう意味では松下先生というのは、わりと広報的なセンスがあたりになった。

伊達 そうそう。広報的というか、対外的にいろいろな面で活躍されましたね。

——あと松下総長時代に現在の新座キャンパスの土地も買っているわけです。

伊達 そうそう。

——これをいろいろと見ていると、それ以外でも例えば群馬県の妙義山であるとか、北海道滝川市に大学を移転させるとかいう話も。

伊達 ええ、熱心でしたね。いまの新座は、立教に来てくれといつて向こう「東武鉄道」がくれたんですよ。初めは、あそこは本当に草っ原で水たまりで、何にもできなかつた。それをもらった。あれは何万坪あつたかな。相当大きかつたでしょう。

それから北海道のほうは、あれも向こう「滝川市」が言つてきたの、立教を作つてくれつて。松下さんは昔の立教のことを考えたんですね、アメリカから教授を呼んで……。立教は、菊井「維大、元法学部長」さんとかああいふ人たちはほとんど賛成したんですよ。町長も何回も来たし、僕も何回も行つた。「この土地はこれだけ寄付します。家はこれだけ建てます。これは町議会でも承認しました」。そういう話まで行つたんだけども、ちょうど松下さんが「都知事」選挙に出て、辞めちゃつたわけですよ。あのあと「総長は」大須賀「潔」さんか。大須賀さんは「いや、私はとてもそんな力はないから、だめです」つて。それでポツとやめてしまつた。あれは惜しいことをしたなと、いまでも思つているんだけどね。

その後、各大学が北海道に分校を作つたでしょう。あ

の一番先駆けだつたわけですからね。

——そうですね。滝川市のほうでもかなり熱心に……。

伊達 そうそう。滝川のほうも熱心だつたんだ、あれは。

——そのあと滝川市では、立教がだめだつたので次に桜美林の誘致もしたようなんですけど、結局それもだめになつた。でもさらにあきらめずに、結局、昭和五〇年代になつて国学院を呼んで、これは実現を見たようなんです。ですから、滝川市のほうでは相当本気で……。

伊達 ええ、やつたんですよ。

——やる気だつたようなんですよ。

伊達 だから土地もくれるし、家も建てるという話だつた。ただ、理念が違つたんですよ。松下さんは松下さんで、いわゆる文化的な大学を作ろうと思つた。ところが、北海道ではそうじゃない。幼稚園の先生だとか、保母さんだとか、看護婦さんとか、そういう実際のな学校を作つてくれというのが目的だつたわけ。それでだいがガチャガチャしたんですけれども、最後にはそこまできなかつた。とにかく行くということは決めていたんだけれども、まだその辺の話がゴチャゴチャしているうちに松下さんが選挙に出て、大須賀さんはだめだといつてあれしたと思うんです。

——その前に先ほどちらつと出た、妙義山に行くという

話もあったようですが、いまのお話を聞いていると、滝川市のお話と妙義山のお話はだいぶ違うような印象があまりです。

**伊達** 妙義山の話は僕は知らないね、全然。

——部長会記録を見てみると、だいぶ話が大きくなっていった。これは滝川の話よりだいぶ……。

**伊達** 農学部を創るといっ話じゃないの。

——具体的にどういっ学部を創るとかいう話は……。

**伊達** 農学校を創ったらどうかといっ話が昔から何度かあった。校友会のOBで、何と言ったかなあ、うるさいOBがいたんだ。名前は忘れちゃったなあ。そういうOBあたりが一生懸命やっただんですよ。直接に総長に、創れ、創れといっに行ったんじゃないかしら。僕はその話あまり聞いていませんね。

——そうなんですな。実際学内でも、『週刊文春』に記事が出て、それで初めてほかの人が知ったといっ感じだっただよう。学内で話をして、といっ感じでは全然なかつたみたいなんです。

**伊達** ああ、そうですか。

——はい。そういう報道があっただから、これはどうなっただんだといっ話が、部長会の記録などを見てると出てきていっわけです。そうすると話の順序が全然違っ。

**伊達** その部長会の記録っていつ頃の記録？

——昭和三六年ですな。

**伊達** 部長会の記録は、僕がいるときは僕がずつと作っただんですよ。そのときにはそういっ話が出たよな記憶は全然ないけどねえ。

——いま部長会の記録のお話が出ました。現在、部長会の記録といっのがだいたい経年的にずつとあるのですが、戦後、昭和二二年ぐらいいから昭和四〇年頃までは、ペン書きのノートのものだけが残されています。それ以降のものはタイプ打ちのものがあります。実は現在残っているのはノートの部分があるわけですが、これが正式の記録なのか、それともあくまでもそのときの書記のためめのノートで、実は別にタイプ打ちのものが作られていたのか、いまちよつと判断のつかないところがあります。

**伊達** いや、そのノートといっのを僕は知りません。おそらく鈴木さんといっ庶務課長が部長会の記録をとつて、彼がその記録をペン書きで一緒に書いたといっ話は聞きました。僕が総務部長になつて、それでタイプを打つようにしたの。だから、それ以前の記録じゃないですか。

——昭和三九年か四〇年。だいたいそうですな。そうすると伊達さんが来られてから、そのあとのよなタイプ打ちの記録を作成されるよなになつたといっことなんで



すね。

伊達 そうそう。

——ああ、なるほど。

伊達 それまではノートにペン書きでしてくれたと聞いています。

——ですから、妙義山の話はそのノートの時代の話です。

伊達 ああ、なるほど。じゃ僕のずっと前の話だな、それは。

——広報課長のときなんですかね。

伊達 そうですか。

——はい。そうすると確かに、そういうあたりは携われていなかったのかなという気はしますね。

松下総長は、妙義山であるとか、滝川に行くとか、そういう話もあったわけですが。

伊達 滝川の話は僕がやったわけですよ。

——これはノート時代の末期の話ですけど、部長会の記録を見ていると、ちょうどこのあたりから「総合計画」というのがやたら文章の中に出てきます。この「総合計画」は具体的にどういうことを指していたのか、記録を見るだけでは判然としないところがあります。

伊達 いつ頃の記録ですか、それは。

——ちょうど昭和三九年とか四〇年頃の、「部長会記録」

ノートの最後ぐらいの話ですかね。

伊達 総合計画ねえ。

——具体的にこういう総合計画というものが作られていたのか、それとも、立教大学全体の発展計画みたいなものを漠然とそう言っていたのか。

伊達 そうそう。総合計画をはっきりとして作ったのは尾形さん（典男）の頃です。尾形さんの頃に、新座のことも含めてどうしようかという具体的な話があった。その前の総合計画というのはむしろ、だんだんあれ（大学）が大きくなって出したんです。それでどうしようかな、という話だったんじゃないかなと僕は思うね。

——そうなんですよ。読んでみると、そのぐらいの意味なのではないか。具体的な「総合計画」と称するものがあつたというよりはむしろ、全般的なことをある程度抽象的に「総合計画を考えながら」みたいな感じだったのかなという気はしていたのですが、たぶんそうなんですよ。

伊達 そうでしょ、たぶんあれは。私学の発展に伴って立教もどうしようかという話があつたのではないか。

——尾形総長時代になりますと、確か「長期計画」という名前です。

伊達 そうそう、尾形総長（典男、総長在任一九七五年～八二年）の頃ね。

——新座利用と池袋の再開発という具体的な形になりませんが、その前となると、要するに大学全体をどうしようかというようなことなんでしょうね。だいたい昭和三九年から四〇年頃の記録を見ていると、毎回毎回、総合計画はどうのこうのというのが出てくるわけです。でもそれを読んでいるだけでは、何となく全体像が具体的には浮かんでこない。そうすると、いまおっしゃったように、のちのようになかったりしたものはなくて、漠然と抽象的なものだったのかなという気はしますね。

伊達 そうそう、漠然と。そういう計画があったということ自体、僕も聞いていませんからね。

——具体的なプロジェクトがあつたわけではない。

伊達 ないんですね。きつと秦さんの夢だったんじゃないかなあ。

——ただ、このあたりで大学の規模が大きくなってきていますから、こつちを動かすところちがおかしくなるというような感じがやはり、いろいろと出てきていたようなんです。

伊達 そうです、そうです。

——そうすると、「やはり全体的なことを考えていかなくちやあ」ぐらいの機運のことを指していたのかなという気はしますね。

伊達 かもしれませんね。

### 初代「総長室長」に

——そういうふうな、総長室を作るということで、もともと秘書課長と広報課長を兼任されていた伊達さんが初代の総長室長（在任一九六六年六月一日～六九年四月三〇日）に就任されたわけですね。総長室ができたことによる影響というか、できる前とできた後では大学運営はだいぶ変わったのですか。

伊達 もう全然違いましたね。組織が全然違いましたから、今まで秦さんが持っていた部分がこつちに移ってしまつた。「職員も」大学出だけしか採らないとか、特に立教の卒業生しか採らないとか、そういうことも決めた憶えがあります。それまではむしろ、高校を出て給仕などで入ってきた人というふうなね。

——そういうふうな事務職員に対する人事権も、だいたいの総長室が実質的に握るようになったのですか。

伊達 職員採用の人事権は部長会で決めることにしたんです。君の頃はどうかだね。

——事務部長の面接を受けました。当時は、総長室長、学生部長、教務部長、総務部長、図書館長、それから就職部長、この六人の面接を受けました。

伊達 そうでしょ。初めは秦さんと庶務課長だけでやつたんですよ。それを全部部長のあれでやるということに

なった。

——事務部長会の権限ということになったわけでしょうか。

伊達 そうそう。

——もともと部長会しかなかったのですが、ある時点で事務部長会というのと分けたわけですよ。

伊達 自然に事務部長会となつたわけですね。学生部長は教員がなつたわけでしょう。図書館長も教員でしょう。教務部長も教員。あとは事務部長というのは総務部長だけだったのかな。事務職員がまだそれほど成長していなかったんですよ。

——職員は総務部長だけですからね。

伊達 ほとんど教員がやつたわけです。だから、事務系の人が事務部長になつたのはずっとあとじゃないですか。

——総長室長を部長待遇にしようと決めたのですが、職員がなるか、教員がなるかということてだいたい議論になったんですよ。

——なるでしょうね、これは。

伊達 結局、僕がなつちゃつた。どういうわけになつたか知りませんがね(笑)。

——いいえ。でも伊達さんのあと、総長室長は教員ですよ。

伊達 教員になつたわけだ。

——部長職は教員が務めるのか職員が務めるのかというのは、個別に見ていくとなかなか大きな問題ですよ。伊達さんが総長室長を引き受けられたときの総長室の権限といいますと、やはり予算が一番大きな権限ですか。

伊達 そうです。予算ですね。それと組合対策です。

——それから広報業務。

伊達 そうそう。

——対外的な、要するに外国との関係などの業務もやはり総長室長。

伊達 それもやつたわけです。

——レーマン先生などは、当時は総長室で抱えられていたわけですか。

伊達 うん、総長室にいたけども、別にこれという役はなかったね。

——対外関係ですね。

伊達 はい。前は、広報課は総務部付き、総務部広報課だったけれども、それは総長室の広報課になつた。

——総長室の広報課にその時点で変わったわけですね。ついこの間まで続いていたわけですね、その組織が。

伊達 あ、そうなの？

——こ一〇年二〇年で、だいたい変わりましたけどね。

伊達 ああ、また変わつちゃつた。

——そうすると本当に、大学の管理上の権限の大半は総長室に集中したという形になるんじゃないでしょうか。総長もしくは総長室に実質的な権限が集中していくことに対して、抵抗のようなものはなかったのでしょうか。

伊達 うーん。まあ、その頃は集中したといっても、やはり総務部長の権限も相当ありましたからね。秦さんがいなくなつて、あまり何もなかったですね。自然に総長室に集まるようになつちやうた。

——総長室ができたときはもう秦さんは退任されていらしたんですか。

伊達 いえいえ。

——総務部長でいらしたんですか。

伊達 はい。秦さんは定年になつてから学院の事務局長になつて行かれて（一九六六年）、行かれたあと亡くなつたわけですよ。

——ああ、そうでしたか。

伊達 だから定年までおれたわけ、総務部長で。

——じゃ総長室ができたあと総務部は、人事とか会計とか庶務とかを全部握つていたわけですね。

伊達 そうそう、握つていました。

——当時はそうすると、営繕も用度も総務部だったわけですね。

伊達 そうそう。

——やはりかなりの権限ですよねえ。だから、実現場のレベルでは、総務部はまだかなり力があつたということなんですかね。

伊達 そうそう。

——現場レベルの管理・運営では総務部が力があり、政策決定上の権限は総長室に移りという。

伊達 あの当時は、権限とかなんかという意識はなかったよね。

——そうですか。かなり意識的に権限を分担されたのかなど思つたのですが。

伊達 いや、権限を分担したというか、仕事を分担したんです。こつちはこうなつたからこれをやるぞ、というふうな。権限的なものは、あまりなかったね。

——そうですね。ちよつと考えると、予算編成権をよそに移すというのは相当あれだと思つたのですか。

伊達 あれは大変だったなあ。でもそのときは総務部長もちゃんと出てきたし。予算編成会議を二か月か三か月やりましたよ、各部長が全部参加して。それをまとめたのが、橋本君。山一證券から来た。彼がほとんどあれをまとめたわけですよ。

——総長室に予算担当というスタッフがいて、その方がおもに予算のベースを作り、部長会の予算会議で採むという形でしたか。

伊達 そうそうそう。

——最近まで続いていたそのシステムは、この時代にくらべてきたということですね。

伊達 そうそう。

——そういうシステムが松下総長時代にずっと形作られてきたけれども、都知事選挙のために突然、辞任されることになったわけですよ。

伊達 はいはい。

### 松下総長以降

——松下総長のあと大須賀総長（一九六七年～七〇年）になったわけですが、やはり辞任されたことによる影響というのはかなりあったのでしょうか。

伊達 ありましたね。大須賀さんという人は、事務能力のほとんどない人でしたからね（笑）。だから、聖公会の信徒でなくちゃいかなというので、大須賀さんになつたようなもので。あれのあとで理学部長の……。

——佃先生ですか。

伊達 佃さん。佃さんも相当長らくやりましたけども、あの人は本当に確実な人でしたね。これという仕事はあまりなかったかも分からないけれど、実際にながちりとやってくれましたよ。

——大須賀先生のあと、平井隆太郎先生が総長事務取扱

〔七〇年四月一日～七一年三月三十一日〕をやつて。

伊達〔松下総長の後には〕菊井さんが〔総長事務取扱、六七年二月二十八日～四月二十六日〕なつたり、みんな半年か何か月かで……。

大須賀さんはなぜ辞めたのかな。選挙するまでに時間があつたんですよ、総長選挙まで。

——ちよつど紛争の時代でしたね。

伊達 ええ。それで平井さん、大須賀さん、菊井さん。菊井先生が良かったんだけどね。尾形さんになつてからようやく、ちよつと落ち着いてきましたよね。尾形さんは非常に官僚意識の強い人だった。

——海軍の主計ですからね。

伊達 そうそう。でも立教のことは本当によく考えてくれたよね。

——そうしますと、大須賀総長時代というのは、大学運営上は特に大きな……。

伊達 ええ、なかつたですね。大須賀さんの頃はもうほとんど何もなかつたんじゃないかな。

——大須賀総長時代は、伊達さんは図書館副館長をなさつて。これは何か？

伊達 大須賀さんが総長になったときに、僕に教務部長になれと言つたわけよ、大須賀さんが。

——ほおー、教務ですか。

伊達 はい。僕は、教務部長というのはあまり好きじゃないから図書館にやってくれと言つて(笑)。図書館は

清水さん(博、館長一九六七年六月一日〜七一年三月三十一日)がいるよ、と言つたけども、清水さんは(図書館に)いないから、副図書館長でいいよと言つてまず副図書館長で行つたわけです。清水さんは館長だったけれども、ほとんどいませんでしたからね。

——ああ、そうですね。じゃ実質上のトップをなさつていたわけですね。

伊達 そうそう。

——昭和四七(一九七二)年からは総務部長になられたわけですね。

伊達 はい。確か尾形さんが総長になって、「帰つて来い」と言つたのかな。

——尾形総長就任より前ですね、伊達さんの総務部長就任は。佃先生の時代ですね。

伊達 ああ、そうか。佃さんが「帰つて来い」と言つたのか。

——はい。佃先生は確実な総長だとおっしゃつていましたけども。

伊達 そう。確実だよ。

——結局、昭和四八年(一九七三)の暮れから四九年の頭にかけて学費値上げを撤回してしまいましたよね。ず

いぶんあのときも財政困難な時代だった。

伊達 困難だったね。

——要するに大須賀時代以降、大学運営上の機構改革もあまりされなくて、財政的にはかなり逼迫したと思いますが。

伊達 そうそう。

——その当時のご苦労としてはどんなことを憶えていらつしやいますか。

伊達 お金がなかつたからね。それに一番苦労しましたけどね。で、組合運動は盛んだったしね。あの当時は、組合は誰がやつたのかなあ。組合とのあれはしんどかつたねえ。

——そうですね。矢面に立たれた。団交なんかにお出になりましたよね。

伊達 ええ、団交に出ましたからね。尾形さんの頃になつてから、逆井孝仁さん(経済学部教授)とか、もう一人いたね、お父さんが同志社の総長をした……、住谷一彦さん(経済学部教授)。あの人たちが組合をやるようになってから、わりに話し合いができるようになってね。よくその辺で、組合の委員と飲みながら話をした憶えがありますよ。

——そうですね。

伊達 それまでは、きつかつたけどね。

——そういう意味では、高度成長期の大学の発展を事務方として支えてこられた。

伊達 そうそう。自分でやらなきゃいけなかったということでしょうね。

——立場的にもそういうことですね。

伊達 ええ。

——伊達さんのすぐ下の大学出の職員というのと、もう工藤さんになってしまっわけですか。

伊達 そう。工藤君と足立君〔省一郎、昭和二八年経卒、総務部長など〕ですね。工藤が一年上で、足立がその下でしょう。

——昭和二八年（一九五三）、二九年卒になりますかね。

伊達 うん。だから、僕が「アメリカに」行った年に工藤君を採用した。工藤君は小学校の先生をしたのよ。

——そうおっしゃってましたね。

伊達 うん。だから、年はちょっといつているんだけどね。足立がちょうどその一年下です。足立の家は池袋の立教のすぐ傍にあつてね。

——足立さんは二八年卒でしたかね。

伊達 二八年ぐらいでしょう。

——ですよ。そうか、それから大卒の職員がぞろぞろと入ってくるようになったわけですね。

伊達 そうですね。石田〔弘、昭和二七作文卒、二九年

経修、営善課長など〕がそうだ。中村太郎〔昭和二八年経卒、三〇年経修、教務部長事務取扱など〕とか。

——笠井剛さん〔昭和二九作文卒、就職部長など〕とか、平野修さん〔昭和二九文理卒、総務部長など〕とかね。

伊達 そうそう。

——だいたい旧制の最後から新制大学の卒業生が出てくるぐらいと一致しているような気がするんですけど。

伊達 あの頃急に大きくなったんですよ、教務部を大きくしたから。

——で、どんどん採るようになったわけですね。

伊達 そうそう。職員を採用して。

——なるほど。ただ、そのあたりのグッと大きくなってくる時代はアメリカにいらっやって、立教の内部のこととはあまりご存じない。

伊達 ええ、大きくなる前です。だから、僕が帰った頃は、秦さんがあれして大きくなるということに対して、立教が応えようというのは、まだまだなかったものね。

#### 「戦後のキーマンは松下総長と尾形総長」

——そうすると、戦後の立教を大きくしたり、あるいは機構改革をしたり、近代化をしたりという意味においては、伊達さんをご覧になっても松下総長と尾形総長とい

うことになりますか。

伊達 そうですね。佐々木先生は小学校を創ったけどね。

——ただ、大規模化、近代化をしてきたのはやはり、そのお二人が非常に大きい。

伊達 ええ。松下さんですね。松下さんがだいたい大きくして、尾形さんがだいたい基礎を作ったという感じですよ。

——法学部の設置も昭和三四（一九五九）年ですから、やはりその時代ですよ。

伊達 そうなんです。——ですから、学部でもそうですし、それから新座に土地も買ったしという感じで、設備の面でも組織の面でもパーンと大きくなったわけです。それに対応する運営組織が松下総長時代に形作られたというイメージでしょうか。

伊達 そういうわけですね。

——法学部の設置は、文科と商科ですつと来た学校なわけですから、長い立教の歴史の中で画期的なことだったろうと思います。しかも当時、東大の一流の教授をほぼ全部引き抜いて、むしろ東大よりもいいような学部を創ってしまった。

伊達 あれはやはり松下さんが、自分が法律をやりまし

たからね。しかも、大学としては法学部を創らなければいかんということもあつたんでしょうね。

——あの辺の主導は、やはり松下先生のアイデアですか。

伊達 そうだったんですね。

——宮沢俊義先生（法教授一九五九年～六九年）をはじめ各部門の第一人者を引っ張ってくるというのは。

伊達 そう。宮沢、菊井（維大、法教授一九五九年～六九年）、それから……。

——末延三次先生（法教授一九六〇年～七〇年）、江川英文先生（法教授一九五九年～六六年）。

伊達 もう一人いたね。石崎政一郎（法教授一九五九年～六六年）

か。——そういう意味では、第二東大という話もありましたが、むしろ逆に、こつちが第一東大という話も（笑）。

伊達 あの人たちはちょうど向こうを定年退職していたから。

——その辺の交渉などはどういうふうにな……。

伊達 松下さんがやったんでしょう。

——松下先生ですか。

伊達 で、尾形さんと呼んできて準備したんだから。——法学部設置準備室ですよ。



伊達 うん。あの先生たちが来るといって、尾形さんも来たわけですよ。

——ちょうど尾形先生は北大を辞めて、東京に戻ってき  
ておられた時期でしたよね。

伊達 そうでしたね。

——いま思うと、あんなとんでもない法学部が私学にできちゃったという意味では、ちょうど伊達さんが広報課長になられた頃だと思いますが、対外的にも大変な反響だったんじゃないですか。

伊達 反響というか、立教に法学部ができたということ  
で一応あれだったけれど、そんなに大きなあれにはなら  
なかったね。

### 在任中最大の「変革」は

——では伊達さんが総長室や総務部長など要職をずっと  
なさっていた中で、例えば立教の事務組織、管理・運営  
組織や方法で、大きく変わったなあ、ずいぶん違ってし  
まったなあと思うようなことはございましたか。

伊達 いや、それはもう初めの頃と全部違いましたよ、  
全く。

——やはり総長室体制になる頃ですか、一番大きいのは。  
伊達

伊達 そうですね、一番大きかったのは。総長室を作る

ことによって、だいたい新しい構想ができましたからね。今までは秦さんが全部やっていたから、秦さんに対するあれもあつたし。まあしかし、時代でそういうふうにならざるを得なかったんでしょうね。

——政策立案部門を創るというのはある意味非常に画期的なことですけども、どこか他大学に学んだようなところはありますか。

伊達 それはあります。広報課などはほとんど他大学の採用したんだから。

——当時、早稲田にも慶応にもあつた。

伊達 ええ、ありましたから。みんなだいたい四〇〇万から五〇〇万ぐらいの予算を持っていましたからね。

——ああ、当時でそんなに使っていた。

伊達 ええ。立教は何とか言つてようやく二〇〇万ぐらいもらつたかな。新聞広告を出したり、雑誌広告を出したり。

——学生募集広告もやっていたわけですよ。

伊達 そうそう。  
——その広報に力を入れると言いだめたのは、私大連などでいろいろ情報を仕入れてきた秦さんであつたわけですね。

伊達 「ほかの〔大学〕はこうやっているよ」と言つたのは秦さんだね。だから立教は、僕なんかも新聞広告

には力を入れたほうです。だいたい昔は連名広告というのがあって、各大学が全部名前を出さなきゃ「連名」でなかった。だから、「これはもつと安くしなければ（広告を）出さないよ」とか、いろいろな交渉をして、ほかの大学の四〇〇〜五〇〇万の予算に二〇〇万ぐらいで太刀打ちしたわけですよ。

——その当時、例えば入学試験関係は、教務のほうにまた別の部署があったわけですか。入学課というのは当時……。

伊達 入学課というのはなかったね。入学試験は、大学全体でやったんじゃないかしら。募集したりするのは広報がおもにやりましたが、あとの合格、不合格などは教務でしょうね。

——入学課ができるのはもううちよつとあとの話で、学生募集広告関係は最初から広報でやっていたということですね。

伊達 そうです。広報でやっていました。

——入学試験の実施は教務ですね。

伊達 そうそう。それから、寄付金をもらうのは総務部ね。

——総務のほうだったんですか、寄付は。

伊達 そうそう。お金のほうは全部秦さんだよ。

——伊達さんが要職に就かれている間の大きなこととい

うと、大学紛争、新座の校地の利用等々になりますか。

伊達 いや、やっぱり総長室を創ったことだろうね。

——総長室を創ったことがやはり一番ですか。

伊達 うん。

——大学紛争の時代は伊達さんは特に……。

伊達 うん。大学紛争の時代は、特に対学生についてはあまりあれしなかったけれど、対組合で。

——ああ、なるほど。

伊達 組合活動は盛んでしたからね。

——昔の立教の組合は強かったですねえ。

伊達 一番強かったです。夜中の一時、二時までやりましたからね。

——総長室に調査役というのを置いたのはこの時代なんですね。

伊達 ええ、その時代です。あの橋本やなんかを入れて行ったときに創ったわけです。

——要するにスタッフですよ。

伊達 スタッフです。

——かなりこれは大きいですねえ。

伊達 調査役というのは、今まで役職は係長から課長しかなかったわけでしょう。年を取ってきてちゃんと仕事もできる。といつて課長の席も係長の席もない。そういう人にはやはり調査役の席をあれしよう。そういうので

「調査役」を創ったわけですよ。

——それで橋本さんが予算担当の調査役をされた。

伊達 そうです。

——例えば調査役を創ろうとイニシアチブをとったのは……。

伊達 それは僕の考えですね(笑)。

——なるほど。では昭和六〇年代、平成のはじめぐらいまで続いた立教の組織機構の骨格は、伊達さんが作られたということですね。実際に部長会記録を見てみましても、総長室の組織を作っていくときにあたってはやはり、伊達さんのお名前がやたらいつばい出てきます。しかも、立教の運営を考えていく場合は、この総長室体制というのがかなり大きな力があつたと思います。

伊達 ああ、そうですね。

——先ほどのお話で広報は慶応、早稲田などにあつたと思いますが、総長室みたいな、政策立案部門というのは他大学には……。

伊達 やはりあつたんでしょうけど、あまり参考にしなかつたね。僕もその後、連盟に顔を出したり、連盟の役員をしたりして各大学のそういう連中と付き合いがありましたから、いろいろ聞きました。総長室体制のようなものがあることは知っていたけれども、参考にしたというのはないです。

——いまの時点から見ると、慶応の塾監局にちよつと似たような感じがしないでもないですね。

伊達 かもしれませんね。

——まあ、あちらは全法人レベルの部局で、したがって慶応は法人が主導しているように見えるわけですが、立教の場合は一応、学校法人立教学院の理事長がいて、にもかかわらず大学の総長の下に権限が集中するようになっていきますから、ほかの学校と比べてもかなり違う。特異な形になっていると思うんです。

伊達 そうなんです。立教はだいたい法人の理事は学外を中心しています。だから学校内から理事になつていったのは、「小、中、高の」学校長の中から一人でしょう。あとは総長。あとはだいたい学外の人だから、実際には総長が全部報告しなければ、ほかの人は分らなかつたわけです。しかも、もう学校のことは学校に任せろというわけで、法人の理事がそれほど熱心じゃないと言つたら悪いけれども、学校内のことには口を出さなかつた。だから、自然に大学が全部あれるようになって。小中高もそれぞれ本来的にはあるんでしょうけれども、全部独立してやっている。そういう意味では、確かに法人組織が他の各大学とは違いますね。

——その辺は伊達さんが最初に大学にお勤めになつた頃から……。

伊達 そういうことですね。昔からそうです。

——そういう、もともと大学主導でやっていたシステムが、規模が拡大していくと松下総長などの個人ではなくて、組織的にできるようなシステムになったということですね。

伊達 まあ、そうでしようね。

——総長の機能を補強するための組織ということですかね。

伊達 そうそう。

### クリスチャン・コード撤廃のこと

——総長のクリスチャン・コード〔信徒条項〕撤廃について、もし経緯など印象に残っていることがあれば……。

伊達 あれはだいたい意見はあったんだけども、結局、チャプレンが、なくてもいいんじゃないかって言うから。速水君〔敏彦、一九六八年～六九年、七五年～七六年チャプレン、六八年～文助教授、七〇年～九〇年教授〕かなんかが。

——ああ、そうですか。

伊達 僕がいる頃はクリスチャン・コードを撤廃したのかな、しなかったのかな。忘れちゃったなあ。

——一九七一年一二月に寄附行為変更の申請をして、

七二年一月に認可されて撤廃しているんです。クリスチャン・コードが撤廃されたあと、七二年四月に総長に就任したのが佃先生なので、まだクリスチャンだったんですね。そのあと佃先生が辞められて、初めてノンクリスチャンで当選したのが尾形先生。あれは一九七五年でした。

伊達 ああ、そうですか。

——ええ。ですから、七一、二年にクリスチャン・コードが撤廃されている。ということは、六九年、七〇年の大学紛争も影響があったのかとちよっと思いうこともあります。

伊達 あれはやはり、総長を選挙するのに聖公会から信徒といったってなかなか総長に適当な人がいない。

——人がいなくなつたということですね。

伊達 そうです。人がいなくなつたというのが一番大きな原因ですね。

——そうすると、撤廃するときに、特に具体的な選挙とか、具体的な人とかを想定しているわけではない、まあ、もういいだろうということですね。

伊達 もういいだろうというよりも、総長は別にクリスチャンでなくてもいいのではないか。そういうふうなあれでした。

——それはどの辺で議論があつたのですか。部長会と

か。

伊達 あれはいろんなところで議論がありましたよ。部長会ではあまり議論しなかったなあ。総長選挙のときが一番議論したかな。

——総長候補者選挙規程改正委員会みたいなものがありますよね。

伊達 あった、あった。

——そういう場ですかね。

伊達 そういうところでもしましたし、総長選挙に関するいろいろな会合で、あの問題はしよっちゅう出ました。結局はチャブレンなどが「そんなにあれしなくてもいいんじゃないか」ということを言っつて、それが力になったんじゃないかという感じがしますけどね。

——特にその規定改正をするときに、理事会で意見が出たとかいうことはないですか。

伊達 それは聞いていません。

——校友会からも特に反発はなかった。

伊達 何もありませんでした。

——まあ、時代だったんですかねえ。

伊達 そうそう。

——確かに信者に限定していると、あの七〇年代でもそういう人はいなかったということでしょうねえ。

伊達 そう。人がいなかった。

——紛争まではなんとかそれでやって来たんだと思いますけど、それ以降は、たいていのキリスト教大学は、それじゃもう回らなくなってしまうすよね。

伊達 ほかの大学はどうか知らんけども、人を学外から呼んでくる場合があったでしょう。だから、昔は立教も学外から呼んできたわけですよ。ところが、最近も総長選挙といったら各学部であれして、みんな学部長が出てくる。だから、なおさら人がいなくなるわけですね。

——そうですねえ、確かに。

伊達 北川台輔さんもやはり呼ばれたことがあるんですよ、いっぺん呼ぼうと言っつて。信者の中からやっただいけれども、北川台輔さんという人があまりよく知られていなかったもので、だめだった。台輔さんはね、立教に来て演説もしたことがあるの。あるんだけど、なれなかったね。

——どうしても学内の選挙ということになると学内の力関係が反映しますからね。総長を選挙するようになったのも松下総長時代ですよ。

伊達 そうですよ。前は理事会が任命したんですよ。

——そうですね。

伊達 佐々木さんのときはね。

——佐々木さんもそうだし、松下さんの最初もそうでしょう。

伊達 最初はそうかもしれない。

——松下さんの二期目は選挙になったんですかね。

伊達 そう。総長選挙をやった。

——その辺のいきさつはご存じでいらつしやいますか。

伊達 その辺はあまりよく憶えていないなあ。どうだったかなあ。

——いや、口の悪い人に言わせると、松下さんについてまでもやられちゃ大変だから任期制にして選挙にしたんだ、というようなことを言う人もいます。でも、あれも大きな改変ですよね。

伊達 かもしれないね。何で選挙にしたのか、ちょっと憶えていないなあ。

——ではそんなところで。どうも長時間にわたりました。ありがとうございます。

伊達 僕もあまりよく憶えていなくて恐縮です。

——いえいえ。